

発信

登別

市内に住む高校生でつくる「フェアトレード学生団体@苦小牧」が企画した。

団体立ち上げ

本愛緒さんは来場者らに訴えた。「私たちがおしゃれな服を安く買える背景には、低賃金や児童労働で作られた商品を不当に安く輸入している現実があります」

地域

明日を創る

★登別明日中等教育学校の学び

苦小牧市で6月半ばに開かれた、発展途上国の産品を適正価格で販売するフェアトレード(FT)を考える催しで、登別明日中等教育学校6年生(高3)の坂本愛緒さんは来場者らに訴えた。「私たちがおしゃれな服を安く買える背景には、低賃金や児童労働で作られた商品を不当に安く輸入している現実があります」

代表の坂本さんは、学校の授業が団体の立ち上げにつながったと話す。同校の後期(高校)の授業には、生徒それぞれがテーマを決める「課題探究」がある。坂本さんは「子ども(高3)の貧困とFT」だ。

2年生(中2)の夏、苦小牧市の国際交流事業でカ



「フェアトレード学生団体@苦小牧」のイベントに参加した高校生たちと、FT商品の香辛料を使ったカレーを食べる坂本愛緒さん(左端) 8日、苦小牧市

①

自発的な校外活動盛ん

く語る。

ンボシアを訪れ、働くために学校に通えない子どもに会った。気の毒に思いつて終わりではなく、社会の仕組みを変えなければダメだと考え、FTに注目した。

坂本さんのように校外活動に励んだり、自らの考えで海外留学したりする生徒は多い。6年生の猪俣愛紗美さん(苦小牧出身)はそんな学友に触発され、昨年の核兵器廃絶を目指して活動する高校生平和大使になった。

開学した2007年度の受験倍率は3・7倍で、18年度までは2倍前後で推移したが、23年度は1・0倍だった。少子化で地元の登別・室蘭の児童数が減ったことに加え、コロナ禍で、学生寮での感染を不安視する胆振管内の保護者らに敬遠されるようになった。

小牧」を立ち上げた。将来は起業して、「フェアトレード」が当たり前の時代になりたい」と力強

被爆地の広島と長崎で集会を開き、ロシアによるウクライナ侵攻の停止を求める署名も募った。「私が(学友から)刺激を受けたように、私が伝えられることもある」と話す猪俣さんは、被爆者の記憶と想いを語り継ぐ被爆体験伝承者になる目標に向かっていく。

卒業生に個性

登別で自らの「明日」を見つけた個性的な人材を輩出する登別明日だが、受験者数は減少傾向にある。

語学や国際理解教育の強みを説いた小西晃校長は、最後にこんなメッセージを送った。「本校が志す『世界に羽ばたくグローバルリーダー』の育成は楽な道ではありません。でも、やる気、勇気、根気があれば大きく成長できる学校です」(室蘭報道部 伊藤空那)